

広島県廿日市町極楽寺本堂

極楽寺という名の寺は全国に随分多いだろうが、茲で述べる極楽寺は現在広島県佐伯郡廿日市町に編入されている山の中にあるお寺で、土地の人のほかは殆んど知られていないであろう。

このお寺の本堂が後世の改造が甚しく加わりながらも古い構架式をよく保存していて、殆んど唐様式仏殿の面白い建築であるので、茲にその大体を紹介しておきたい。

この建築を知ることが出来たのは京都美大・佐和先生から言って戴き、廿日市町、正覚院の方々に案内して戴いたからで厚く御礼申し上げる。

(一) 極楽寺の記録

極楽寺は廿日市町から五軒ばかり西北に当る山上にあり、かなり山道を歩かねばならないが、寺から瀬戸内海を見下した景色は実にすばらしい。そうして、今でも電燈がなく、ランプを使っている別天地である。

現在本堂のほか門と一、二のお堂と極く新しい庫裡とがあるばかりである。寺の歴史に就いては古い記録が残っていない、山麓廿日市町、正覚院に保管されている「上不見山略縁記 極楽寺」と書かれた箱に入れた巻物と「極楽寺浄土王院諸扣」と題する袋綴本とが主な資料である。後者から必要な部分を抜いてみると、

一、佐伯郡白砂村真言宗極楽寺

山号ハ上不見山 院号浄土王院
此山号院号勅号の由往古ヨリ申伝候也

一、本尊千手観音 周尺丈六ノ坐像也

昔聖武武天皇宇天平九年 丁/丑 行基菩薩於当山以杉霊木為御素木彫刻安置是山上焉
云/云・・・・

一、本堂一字 六間四面二重屋祢向拜唐破風屋根檜皮ふき棟宝形

但唯今者上屋根かやぶき下屋根そぎぶき間数者昔之通り

その他大師堂、求聞持堂、鎮守社、大日堂、仁王門が挙げられている。

次に本堂については「棟札覚扣」として、次の棟札の写しがある。

聖天 中天
迦陵①伽声 大檀那大梵天王大檀主毛利元就朝臣 永禄五年

(梵字) 奉再興上不見山院号浄土王院極楽寺本堂国家太平諸人②楽攸

哀愍衆生者
我等今敬礼 勸進物帝釈天王勸請者当住持③源法師敬白

裏書 奉為大檀主国家安全子孫長久祈攸

(再興は再興 ②楽は快樂の書き誤り)

①頻 ②快 ③祐

さらに

天明八年 戊申 四月吉祥日本堂キリノカワ柱不殘交替御拜屋称葺替其他廊下
ふきかへ本堂茅葺替木部屋一字再建立 地藏堂ふきかへ

現住本坊瑞如

庄屋 当村 理平太
口口 同代 衆
大工 こふ助木挽坪平

覚

- 一、 本堂下屋祢葺替仁王門屋祢並柱替相調
寛政二年四月 日
現住本光瑞如

と記されているが、以上が本堂に関する主な記録である。

(二) 本堂の略述

本堂は現在の位置にあったのではなく、数十年前には少し離れた位置にあったのを現位置に移したものである。平面は方三間の母屋に四方一間通りの裳階を付けた一階造り、二重屋根檜皮葺(ひわだぶき)方形造り建築である。

即ち、裳階から言えば方五間、実尺は正面で約三十九尺(11メートル8)の大きさを持ち、正面は上の屋根が長く前へ延びて縋破風(すがるはふ)となり、軒唐破風をもつ向拝を形成している。正面はこの向拝のため大分感じが違うが、側面から見ると法界寺阿弥陀堂を思わせる軽やかな感じの堂である。(第一、第二図)

裳外は外周りは吹放しで方柱を用い、柱上絵様大斗肘木で軒桁をうけ母屋とは海老虹梁で連絡している。このあたりすべて新しい松材が使われ、古様を残していないのが誠に惜しまれ、垂木も皆新しいものである。

母屋には正面中央格子戸、両脇間火燈窓、側面前方の間火燈窓中の間棧唐戸、後方の間板壁という外装で、内部には正面後寄りに須弥壇を設け厨子を置く。その両脇の来迎柱から前へ二間に亘って二本の大虹梁を架し、中央に大瓶束を立てて方一間の内陣の天井を造り、その四周は扇垂木を使った化粧屋根裏とするが、この部分にも柱毎に海老虹梁を架ける。(第三図)

すなわち、この辺の構架式は全く禅宗様(唐様)の古い伝統をそのまま受けついで来ているものであって、ただ在来の和様のところは側廻り出組斗供における支輪が蛇腹支輪であるくらいで、他はすべて唐様によっているところは誠に面白い。内陣方一間の天井が現在格天井であるが、これはもと鏡天井で竜の絵があったというから、ここももとは唐様であったわけである。母屋の柱はもちろん円柱、上下に粽(ちまき)を付け、柱脚には木製礎盤を具えている。

(三) 本堂細部の新旧

この堂は遠望すれば誠に落ちついた感じのものであるのに、近付いて見ると裳階廻りや内部天井など案外古材が残っていないのが、大変惜しまれる。

しかし、母屋の柱の一部、両側面の火燈窓、内陣天井廻りの斗棋の一部などには、たとえ棟札写しにいう永碌と確定し得ないまでも様式上室町時代と認められる所も残っているし、構架式に到っては前述のような鎌倉の禅宗様(唐様)直系の古い形式をもっている点において注意すべき建築と言えよう。以下堂の細部について見て行こう。

母屋ではその柱が上下綜付の円柱で様式、経年ともに室町と認められるものが多いが、その下の礎盤は柱より時代が下るものが多いと認められる。堂は現在木造床が張られているが、床下に入って見ると床組や束などが極めて粗雑で仮の間に合せの様であり、転用材もあって当初の状態を留めていないのは、移転その他のためであろう。そして、現行の木製礎盤は外側半分だけ仕上げられ、内部は仕上げがなく荒削りのままである。それで一応古くから床が張られていたものとも見えるが、柱の粽は丁寧に仕上げられた上、かなりの経年を示している。

従って永祿に建築して後礎盤を取換えると共に現在の床張りとしたので、当初は土間床か四半瓦敷位だったかもしれない。何分移転しているので、現在の床下からは掴み難い状態である。

次に正面の火燈窓は数十年前に新築されたもので、形も誠に整わない変なものであるが、両側面にあるものは形もよろしく、様式上からは室町と認めてよいと思われる。(第四図)

正面中の間は格子戸となっているがもと両開きの恐らくは棧唐戸を吊り込んでいたことが残っている藁座(わらざ)から証される。内部二本の大虹梁など長大な構架材が後補材に取替えられているのは、どういう理由によるものであろうか。それほどまでに荒れていた時期があったのだろうか。

母屋の側斗拱は内外とも出組で内部では扇垂の下に手挟(たばさみ)様の木鼻を出す、これも古い形を模しながら新しい線様に変っている。実肘木も同様であるが。斗拱そのものは是等に似ず古様を示している。(第五図)

但し、斗供間に和様の支輪を配しているのは肘木の角張った曲線と共に不似合であるが、厨子は他から待って来て嵌込んだらしく、不似合に大きい。しかし中の本尊様は後補が加わりながら平安時代にまで朔り得るようである。

裳階廻りでは新しい材料ばかりで、特に記すことはない。前出の「極楽寺浄土王院諸如」に「本堂キリノカワ柱不残替・・・・」とあるが「キリ」が「キタ」のつもりで北の側柱かとも考えられるが、北側だけに限って取替えた様に見えず、皆同じ様な経年を示し、古い材料が見出されない。

垂木も皆替えられて居り、斗拱の中心を吹寄にしたもので、軒出も少し浅くなっている様に見受けられる。

なお、この堂内には棟札も多数保存されているが、皆江戸末、明治以後のもので、慶応三年の「奉再造観音堂御拝・・・・」というのがあり、これは現在の向拝の年代を示すものであろう。

屋頂の露盤宝珠は露盤に慶長四天(1599)云々の文字が陽刻されており寺蔵の写によると南面に、

上新造」極楽寺御堂」之上葺寺舛」鑄貌共仁以」之矣者包」旦那藤原朝臣」児戸簷事備」前守元次公」本願法印」③宗」皆慶長四天」己亥霜月吉日(」は行の変りを目を示す。)同西面に 良辰」龍雲」奉之

と読まれ、上宝珠には

宝永元季卯月」吉辰月当寺」一代恵海浩之」治工」山田氏貞能

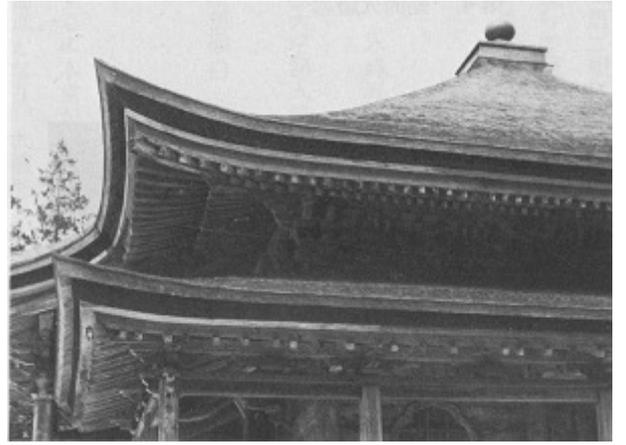
と誌され、年代は明らかである。(露盤下の四角い台は後輔) 以上のような次第でこの堂は外観を一見したところ、正面の向拝を除けば、京都醍醐の法海寺阿弥陀堂を思わせる様な軽快な建築で、近寄って細部や内部を通覧すれば禅宗様が大部分を占め、特に母屋内部の構架式はたとえ材料が取替えられていても、禅宗様の古式を厳格に伝えている点で、この地方では珍しい建築といえる。即ち、内陣天井を小さくして周囲に海老虹梁などを用いたのは、やはり近くに不動院金堂などの禅宗様の名建築があった土地がらとも言うべく、この伝統は近世になっても仏通寺本堂などに見られるものである。

京都などでは近世になると、鏡天井が大きくなって、古様を残すものは泉涌寺本堂くらいしか見られなくなるが、当堂ではそれが守られて来ている点が貴重だと言うべきであろう。

この点からも、また全形が美しい点からも、また虹梁下端の手法などに地方色が出ているところから。言っても、県の文化財ぐらいには指定して十分な保護顕彰の道が講ぜられることが望ましく考えられる。(終)



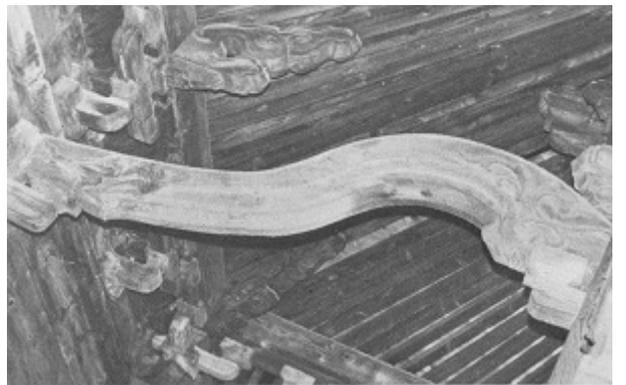
極楽寺本堂正面



本堂側面



側面火燈窓



母屋外陣見上げ



本堂内部構架